



Title	仮想のシナリオから見る障害者から障害者へのまなざし : 複数の障害を持つ人の語りへの一考察
Author(s)	周, 氷竹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2023, 2022, p. 27-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91566
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

仮想のシナリオから見る障害者から障害者へのまなざし
——複数の障害を持つ人の語りへの一考察——¹

周 氷竹

1. はじめに

障害者同士の理解と連帯が、しばしば当然視されている。しかし、障害を持つ当事者同士という関係にあったとしても、必ず対等で、理解し合うことができるとは限らない。なぜならば、障害には、種類、重度、段階などの差異があるため、障害者個人と障害者同士の関係性も多様性に富んでいるからではないかと思われる。このような背景から、差異を認めた上での連帯に向けて、障害を持つ当事者同士の相互理解の構造を明らかにすることが必要だと考えられる。そこで、本稿は複数の障害を持つ人の事例を分析対象とし、障害者同士の相互認識の一端、及びこのような認識に内包された社会的通念を解明することを目的とする。

2. 先行研究とリサーチ・クエスチョン (RQ)

身体障害間の相互認識については、ここでマーフィー (1997) と秋風 (2008) の論考を取り上げる。マーフィーは、身体障害者の中には、健常者の身体を一番良いものとしてとらえ、障害の種類や重度によって序列化する、いわゆる障害のヒエラルキー (hierarchy) が存在することを指摘している。その評価の基準は、標準的な人間の形からどれだけ離れているかであるとしている (マーフィー 1997 : 176-177)。

身体障害者の意味世界を考察した秋風は、先行する障害者研究はその障害が可視的で、機能制約を伴う重度障害者に特化してきたと述べている (秋風 2008 : 53)。そして、軽度障害者の語りの分析から、障害の重さと生きづらさは比例するといった、当事者らの実感とは合致しない社会的通念が力強く働いていることを明らかにした。このような障害のヒエラルキーが当事者らの葛藤を封じ込め、彼ら・彼女らをより深い閉塞感においやっているというのである。

精神障害者の場合、早野は、社会復帰の程度に応じて序列化されると述べている (早野 2018 : 47)。社会的な役割遂行能力を持っている健常者を上位として、健常者に近づくほど精神障害者は評価され、それに遠くなるほど、評価は低くなる。

以上の先行研究から、身体障害と精神障害それぞれの当事者間で異なる基準が存在する

¹ 本稿は2023年3月17日東京国際大学で開催された社会言語科学会第47回研究大会で発表した内容を大幅に加筆訂正したものである。また、本稿は科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業 (JPMJFS2125) の助成を受けたものである。

ことがわかる。すなわち、機能制約の度合い、他者に計測される生きづらさの程度、社会復帰の程度といった、基準により序列化が産出されていると想定することが可能である。しかし、身体障害者と精神障害者という2つのカテゴリーに属する障害者間で、どのような捉え方があるのかについて考察された研究があまり見られない。

そこで、本稿は複数の障害を持つ当事者である SZ の語りの分析を通して、身体障害者と精神障害者間の相互認識を考察する。また、その認識の背後に機能している社会的通念を明らかにすることを目的とする。この目的を達成するため、以下の3つのリサーチ・クエスチョン (RQ) を設定する。

RQ① 障害者が自分自身をどのように位置付けているか。

RQ② 障害者がほかの障害者をどのように捉えているか。

RQ③ 障害（者）に関する語りにいかなる社会的通念が表出されているか。

3. 研究方法

上記のリサーチ・クエスチョンを明らかにするために、本稿では当事者の語りを分析する。そこで中心となるのは、自分自身をどのように位置付けているのか、ということと他者をどのように捉えているのかを明らかにすることであるため、ナラティブ研究で主に用いられている「ポジショニング分析」と「仮想シナリオ」という概念を援用する。データおよびこれらの分析の枠組みについては以下で説明する。

3.1. データについて

本稿では2022年5月にZoomを通して行われた2者間のインタビューを取り上げ、これを分析の対象としてのデータとする。SZはもともと筆者の精神障害者のライフストーリーを記す研究に応募し、インタビューに参加した。SZは、一般就労を通じて会社員として働きながら、うつ病の当事者グループでボランティアとして活動している。インタビューでは、SZにうつ病に関する経験を語ってもらっていた。しかし、その途中で、SZは自分が杖を利用していること、すなわち、身体障害を持っていることを開示した。

筆者とSZのプロファイルは以下表1の通りである。

表1

会話参与者	世代別	性別	職業	言語的背景	障害
筆者	20代	女性	大学院生	中国語 L1 ² 話者 日本語 L2 話者	非当事者

² L1 は第一言語を意味する。第一言語は習得順序が一番早い言語という意味で、母語と同義に使うこともある。下記の L2 は第二言語を指し、すなわち、第一言語を習得した後に、学習し使用することができるようになった言語である。

SZ	30 代	女性	会社員	日本語 L1 話者	うつ病当事者 身体障害当事者（杖の利用者）
----	------	----	-----	-----------	--------------------------

3.2. 分析枠組み：ポジショニング分析、仮想のシナリオ

ポジション（position）とは、語り手が潜在的に所有しているものではなく、相互行為の場でナラティブが伝達されるプロセスにおいて出現する立ち位置である。Bamberg（1997、2004）はポジショニング分析を3つのレベルに分けている。まず、レベル1 語りの世界におけるポジショニング、次に、レベル2 他者との相互行為におけるポジショニング、そして、レベル3 その場その時の文脈を離れても成立する、社会文化的なポジショニングである。ポジショニング分析を行うことで、語り手のアイデンティティを包括的に捉えることが可能となる。

仮想のシナリオ（hypothetical scenario）はナラティブ分析の対象となりうる典型的なスモール・ストーリー³である。仮想のシナリオは現実世界の出来事ではなく、実際に起こっていない出来事のシナリオに関する語りである（Georgakopoulou 2001）。佐藤（2020:103-104）は仮想のシナリオを「反実仮想」と「仮説」に分けている。前者は実際には実現しなかった事態を実現したものと想定する仮想で、後者は未実現の実態が実現した場合の仮定としている。

近年のナラティブ研究で、仮想のシナリオという概念を使用した研究は秦（2014）、佐藤（2020）、児島（2020）があげられる。

秦（2014）は東日本大震災の経験談といった語りの中で出現している2つの「仮想のシナリオ」、すなわち、インタビュー「もし前日や翌日だったら被害に遭っていただろう」という現実より悪いシナリオを持ち出しことによって、現実では被害を受けなかったという過去の出来事に対して再評価を改めた。インタビューアが放射能汚染に気をつけていると述べた後、インタビューイは「もし東京にいたら（放射能汚染に）気をつけられないかな」という仮定の語りを持ち出し、間接的な不同意を表出している。

東日本大震災で被災しなかった人の語りを分析対象としている佐藤（2020）では、語り手が仮想の語りにおいて擬似被害者、生還者、成長者といったアイデンティティを構築する様子が描かれている。仮定の語りが語り手のアイデンティティ構築において重要な位置を占めていることが確認できた。

児島（2020）は「赤ちゃんに対して大人が行うような『小顔マッサージ』を行う」という仮想で非現実的な場面を描いている多人数女性の会話を取り上げている。分析を通して、参加者らがこのような仮想のシナリオを協働で描くことにより、参与者らは社会的自己と

³スモール・ストーリーは、現在進行中の出来事、未来や仮定の出来事、語りを据え置くこと、また語るのを否定することなど、会話の文脈において頻度が高く、目立つナラティブ行動の全域を捉える包括的な用語である（イエルガコポロ 2013）。

して母親同士として表出していることがわかった。

以上、仮想のシナリオが語り手の立ち位置を交渉するスペースとなり、アイデンティティ構築に重要な機能を果たしていることが確認できた。本稿もこの概念を用い、当事者の語りの中で出現する仮想のシナリオを巡って、ポジショニング分析を行い、当事者の自らの位置付けと他者に対する捉え方を精査する。

4. データ分析

SZは当事者グループでボランティアとして公式SNSアカウントの運営に携わっている。しかし、体験談などを共有する、メンバー同士の活動には参加しないと語った。データ 1 はその理由について述べている語りである。

データ 1 「当事者の人から見たら キラキラしたような感じに見えるタイプの方になる」
(録音の 13:28-14:58)

01. SZ: あ の: オープンチャットとかを え お話したりとかすると ん::
02. 筆者: ん
03. SZ: 私どちらかといえば あ の: (.) なんて言えればいいですかね もう結構
04. () ほかに友達とか
05. 筆者: ん
06. SZ: あ の なんとか 職場の人とかとも一緒にお話ししたりとか ご飯食べに行
07. ったりとか
08. 筆者: ん
09. SZ: いわゆるその (.) キラキラした感じ うつ病の人 当事者の人から見たら
10. キラキラしたような感じに見えるタイプの方になると思うんですけど
11. .h なんか それが逆に あ の なんだろう 当事者さんと話してみたら やっ
12. ぱり あんまり@@@ 趣味とかも普通にたくさん持ってますし
13. あんまりこう ん なんか逆に負担 かけちゃうかなとか
14. 筆者: あ:: なんか 自分は自分の方がなんか今もそんなに当事者っぽい ではなく
15. くなって だから そ その一面をちょっと見せたくない
16. 見せたくないというか ちょっと相手に
17. なんか =
18. SZ: = ん そうですね それがまあ もちろん私も本当にもう人混みもあんまり
19. 好きじゃないですし
20. ん えっと 初対面の人元々人見知りなので嫌いですし あ の こうフラッ
21. シュバックを起こして苦しむこともありますし 色々あるんですけども
22. 傍から 傍からと言え ば 当事者から見れば
23. あ の 充実してるじゃんみたいな感じで見られるタイプ...

SZ は当事者活動に参加しない理由について、もし自分が参加すれば、当事者グループのメンバーに負担をかけてしまうという仮想のシナリオを描くスモール・ストーリーを用い、説明している。

このシナリオにおいて、障害を持たない職場の同僚たちと交流し、食事をする、また、多種多様な趣味を持つという具体性を帯びた出来事 (6,7) を SZ はあげつつ、レベル 1 (ストーリーの世界) として、世間一般が抱える、無気力で雰囲気がおもくるしいといったう

つ病のある人に対するイメージに、そぐわない、「キラキラした感じ」(9)な人と自分を位置付けている。一方、SZはグループ活動に参加するほかの当事者を語る際に、距離感を有する敬称「当事者さん」(11)を使用している。さらに、シナリオの現実味をより聞き手に印象付けようとする、仮想の当事者によるからかい「充実してるじゃん」(23)を用い、同じグループに所属するメンバーに対して、親近感が感じられない自己を表出している。

レベル2(相互行為の場)では、「えっと」(20)、「あの」(1, 3, 6, 12, 20)、「なんと言えればいいですかね」(3)、「なんだろう」(12)のように、言い淀んでいる姿が観察された。この流暢でない話し方から、SZは部外者の筆者に向けて、当事者グループの一員としてグループ内部のことを話すということに躊躇する様子が窺える。この点について、ストーリーを収束する14-17行目の語りからも裏付けられると考える。SZは「人混みもあんまり好きじゃない」(18)、「初対面の人は元々人見知りなので嫌い」(20)、「フラッシュバックを起こして苦しむこともあります」(21)などの理由をあげている。このことから、活動に参加しない理由は、ほかの当事者に自分のキラキラした様子を見せたくないという点だけではないことを説明し、当事者との異質性の表出を緩和している。

レベル3では、当事者というカテゴリーからSZは距離をとりたいが、当事者団体の一員として部外者を前に慎重に内部の事情を話す自己両方が表出され、SZの葛藤している姿が窺える。

データ2はデータ1の続きの語りで、SZは活動に参加しない理由をさらに追加している。

データ2 「目に見える障害を持っている人は羨ましい」(録音の16:24-18:16)

01. SZ: まあ オフラインとかの イベントに行けば もう私杖ついているんで.h あ
02. の: あ (.) あの まあ
03. ん 障害者って (.) ていう言葉はあんまり 好き (h) じゃない
04. [あと でも 障害抱えてるんだっていうふうに見えるんですけど
05. 筆者: [はいはい ん
06. SZ: でも: えっと これも ん: メンタルあるあるってあんまり言いたくない
07. んですけど
08. 結構やっぱりメンタルを抱えてる人は (.) あの まあ 私も含む私の家
09. がそうですけど
10. 理解されてない人が 理解されないことが結構多いじゃないですか
11. 筆者: ん
12. SZ: ん それで 苦しんでる人が結構多いんですけど
13. 中にはちょっとあの ゆ ん あんまり 歪んだというか
14. あの 障害 目に見える障害を持っている人 羨ましいとか たまに
15. 筆者: ん::
16. SZ: オープン(チャットで) 言葉が () 注意しても 時々出てしまうんですよ
17. 筆者: ん
18. SZ: ん だから ん そういう意味でも やっぱり見た目の障害も目に見えて持つ
19. ているので (.) ん::みたいな (h) @@@@
20. 筆者: なるほど そうですね
21. SZ: だから なんですかね

22. 本当はちょっと IM さんとかみたいに皆さんと本当は ちょっとお話し
23. 筆者: ん
24. SZ: あのこう この人はこう この人はこういう考えなんだとか こういう考え
25. なんだなとかって こう自分の活動に活かせるようなことしたいんです
26. けど
27. 筆者: はい
28. SZ: やっぱオープンチャットをずっと見てるから 見てるので まあ
29. こういう考えの人いるんだっていうのがわかってるので 実際に会うのが
30. ちょっと やっぱ怖いなっていうのが (h) @

データ 2 では、2 つのスモール・ストーリーが展開されている。

1 つは「目に見える障害を持っている人は羨ましい」というオープンチャット⁴で流されたストーリーで、もう 1 つは「もしこのような発言がない場合、自分もほかのボランティアのように活発に参加者と交流する様子」という仮想のシナリオである。

レベル 1 の分析に入る前に、まずはオープンチャットで流される発言に注目したい。「目に見える障害を持っている人は羨ましい」というのは、「目に見える」障害を持っている障害者は記号をもっている障害者として、できないことがはっきりと見て取ることができる。このことは、目に見える障害をもっている人はディスアビリティとしての理解または承認を得やすいからであるのではないかと分析できる。こういった発言は目に見えない精神障害当事者の生きづらさを露呈している一方、目に見える障害を持っている人の生きづらさを見過ごしていると言える。そのため、物語世界（レベル 1）では、活動に参加したいが、自身の発言により恐怖感を感じ、活動に参加しないようにする SZ の姿が表出されている。また、障害者という言葉、障害を固定された属性として捉える言語使用（「障害者って（.） ていう言葉はあんまり好き（h） じゃない」（3））に抵抗感を示すことから、健常・障害 2 分法に抵抗する SZ の姿が見られている。

レベル 2 では、SZ は当事者目線で例えば、「メンタルあるあるってあまり言いたく無いですけど」（5）、「理解されてない人が 理解されないことが結構多い」（7）、「苦しんでる人が結構多いんですけど」（9）と言っていて、ほかの当事者を理解できる人として、理解を得られないが故に苦痛を感じる当事者らに共感する姿勢を示している。インタビューの中では、非当事者の筆者を前に、SZ は部内者として、慎重に、自分を不快にさせる発言をする精神障害当事者に対する不満を表している。目に見えない精神障害は、外見からだけでは障害があることが判断しにくい。そのため、周りから勝手に障害のない人であるとみなされてしまうことが少なくない。すなわち、障害を持つこと自体がパッシング（passing）され、他者から勝手に健常者とみなされ、周りの理解を得られない場合が多く

⁴ オープンチャットは、興味関心事や日常生活に密着した話題についてトークルームの中で会話や情報交換が楽しめるサービスである（<https://linecorp.com/ja/pr/news/ja/2023/4526>を参照）。新型コロナウイルスにより、対面での活動参加が制限されている中、グループのメンバーらはオープンチャットを利用し、コミュニケーションをとっている。オープンチャットでは、フリーアイコンかつ仮名を使用することで、個人情報特定されることはない。

存在する。SZ は当事者として、オープンチャットにある発言の産出に至る背景もわかっていたが故に、共感的な態度を示しているのではないかと分析する。

全体の語りを通して、データ 2 では、当事者グループとの関係が疎遠になっている自己に加え、部外者を前に、慎重に内部の「悪口」を話す自己が表出されている。レベル 3 では、オープンチャットで流された「目に見える障害」に関する発言により、グループの活動に距離を置き、無力感、恐怖感が感じられる SZ が表出されている。

5. 考察

RQ①について、SZ は当事者の経験、苦痛を理解する、また世間が精神障害のある人々に対するスティグマが根強く存在するという現状を知る部内者として、慎重に当事者グループ内部の事情を語り、精神障害の当事者という立ち位置を維持している。一方、普通に働く「キラキラしたような感じに見える」人であるとみなされ、自身の苦痛をわかってももらえない身体障害の当事者として、ほかの精神障害当事者との異質性を表出している。全体の語りを通して、このような複雑な立ち位置の間を徘徊している SZ の姿が示されている。

RQ②と③について、2 つの序列化が観察された。

1 つ目は、障害を持たない人と同じ職場で働く SZ は、自己を「キラキラしたような感じに見える」人として位置付け、ほかの当事者との差異化を図り、障害を持たない職場の人に近づこうとする様子が見られた。健常者中心（特に、働く能力で計測する健常者中心主義）といった社会的通念が当事者の意味世界に浸み込み、語りの産出に至ったのではないだろうか。これは、先行研究で述べられた、社会復帰の度合いを物差しとする序列化の事例と言える。

2 つ目は、先行研究では見られなかった、可視的なインペアメントの有無を指標とした障害の序列化である。「目に見える障害を持っている人が羨ましい」という「声」から、「目に見える」身体障害が目に見えない精神障害に比べて、理解されやすい可視的インペアメントがあるが故に、目に見える・見えないという視覚的な基準に沿ってヒエラルキーが作られ、序列化されていることがわかった。こういった社会的通念に呼応したヒエラルキーの存在が障害者同士の関係をより分断させ、「目に見える障害を持っている人が羨ましい」のような発言の産出に繋がるのではないかと考えられる。こういった発言がオープンチャットのような、個人が特定されたい空間によって拡散されている。結果として、目に見える障害と見えない障害を同時に持つ当事者 SZ に感受されるスティグマ⁵として受け止められ、当事者を傷つけ、疎外を感じさせ、結果的に排除したのである。

⁵ 西倉（2016）はスティグマを、行使される（enacted）スティグマと感受される（felt）スティグマの二つに分け、議論を展開している。前者は障害者に対する差別的・侮辱的な態度や言動として表出するスティグマで、後者は障害者によって差別的な取り扱いに対する恐怖心や不安感を指す。

最後に、ナラティブ研究の観点から本稿の2つのデータともに出現した仮想のシナリオの機能についての考察を行う。今まで仮想のシナリオといった概念を使用した研究では、仮想のシナリオは語り手のアイデンティティを構築するスペースになりうることが例示されている。本稿でも、起きたかもしれない、またはまだ起きていない出来事を語ることを通して、語り手が自分の立ち位置を調整し、アイデンティティを構築していることが確認できた。本稿の分析を通して、仮想のシナリオは鏡のような装置として機能し、他者に対する潜在的な認識、また、語り手の規範意識を映し出すスペースとなる可能性が見出されてくるのではないかと考えられる。

6. 結語

本稿は複数の障害を持つ人によるインタビュー・ナラティブ、特に仮想のシナリオを含むナラティブを分析し、障害者同士の間でどのような相互認識があるか、このような相互認識の背後にどのような社会的通念が潜んでいるかを明らかにした。また、本稿もナラティブ研究の文脈で仮想のシナリオの機能を考察した。

分析結果として、障害者同士において2つの序列化が確認できた。1点目は、精神障害者の間で就労を指標とした序列化、すなわち、能力主義を中心とする健常者中心主義である。健常者の就労状況を模範的なものとし、近づくほどよいとみなされている。2点目、当事者の語りで可視的なインペアメントの有無（見える・見えない）を指標とした障害の序列化も観察された。発症していない時、見た目から判断しにくいため、精神障害者はよく健常者として判断される。それによって、障害のある人として得られるべき理解と承認が得られない場合が多い。こういった経緯で、「目に見える障害を持っている人 羨ましい」のような発言が出てしまい、見える・見えない障害を持っており、両方の障害で苦しんでいる当事者 SZ を疎遠させた。

また、本稿では、ナラティブ研究でよく取り上げられる仮想のシナリオは他者に対する認識を暗示的に表出し、内なる社会的通念を映し出すスペースとなる可能性が示されている。

書き起こしに用いた記号

(n.m) 1 秒以上の沈黙	: 直前の音の引き延ばし	(.) 小休止
@ 笑い（個数は長さ）	.h 笑いに伴う発話	... 言い淀み
↑ 直後の音の上昇	[オーバーラップ開始	= ラッチング

参考文献

秋風千恵（2008）「軽度障害者の意味世界」『ソシオロジ』第 52 巻 3 号, pp.53-69.
 イエルゴコポロ、アレクサンドラ（2013）「ナラティブ分析」佐藤彰・秦かおり・岡本多香子訳、佐藤彰・秦かおり（編）『ナラティブ研究の最前線：人は語ることで何をなすの

か』ひつじ書房, pp.1-42.

児島麦穂 (2020) 「意見と価値観の不一致の発生と同調のプロセス : 20 代の女性多人数会話において表出する外国人に関する意識を事例に」『言語文化共同研究プロジェクト 2019』, pp.59-68.

佐藤彰 (2020) 「第 5 章 仮定の語りにおける語り手のアイデンティティ構築 震災経験をどう語るのか」秦かおり・村田和代 (編) 『ナラティブ研究の可能性』ひつじ書房, pp.99-122.

西倉実季 (2016) 「合理的配慮をめぐるジレンマ —アクセスとプライバシーの間」川島聡他『合理的配慮 —対話を開く 対話が拓く』有斐閣, pp.163-180.

秦かおり (2014) 「国外在留邦人が語る東日本大震災 —対面の場における意見交渉の過程とアイデンティティ表出を分析する」『言語文化研究』40, pp.123-142.

早野禎二 (2016) 「精神障害と社会 —歴史社会学の視点から」『東海学園大学紀要』第 23 号, pp.29-53.

マーフィー、ロバート・F (1997) 辻信一訳『ボディ・サイレント』、新宿書房.

Bamberg, M. (1997). Positioning between structure and performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7, pp.335-342.

Bamberg, M. (2004). “We are young, responsible and male”: Form and function of “slut-bashing” in the identity constructions in 15-year-old males. *Human Development*, 47, pp.331-353.

Georgakopoulou, Alexandra. (2001). Arguing about the future: On indirect disagreements in conversations. *Journal of Pragmatics*, 33, pp.1881-1990.